

後期・邪馬台国の時代⑨

～大国主命～

河村哲夫

八十神による迫害

八十神(兄弟たち)は八上比売に求婚するため出雲から因幡国に向かったが、大国主命に荷物を持たせ従者として連れていった。

その途中、八十神に痛めつけられた白うさぎを助け、白うさぎは「あなたの求婚は成功するでしょう」と予言した。——ここまでが前回である。

その後、『古事記』は次のように記す。

「白うさぎの言ったとおり、八上比売は八十神(兄弟たち)に答えて、『わたしはあなたたちの言うことは聞きません。大穴牟遲神と結婚しようと思います』と言いました。そこで八十神が怒って、大国主命を殺そうと相談して伯耆国の手間の山本に行って、『この山に赤い猪がいる。我々が追い下ろすから、お前は待ち受けてそれを捕えよ。もしそうしないと、きっとお前を殺してしまおう』といって、猪に似た大石を火で焼いて転がし落としました。その石を受け止めようとして焼かれて死んでしまいました。

そこで母の神が泣き悲しんで、天(高天原)に昇って神産巢日神(カミムスビ)のもとに参りましたので、蜆貝比売(キサガイヒメ・赤貝)と蛤貝比売(ウムギヒメ・はまぐり)を遣わしてどうにか生き返らせました。

蜆貝比売(キサガイヒメ)は赤貝の汁をしぼり、ウムギヒメ(蛤貝比売)ははまぐりの貝で混ぜて母の乳汁をつくって塗りましたから、元気になって出歩くようになりました」

白うさぎの予言どおり、八上比売は八十神の求婚をはね除け、大国主命との結婚を宣言するが、八十神は、伯耆国の手間の山本において猪と偽って、火で焼いた大石を落として、大国主命を焼き殺してしまった。

伯耆国とはもちろん鳥取県のこと、手間の山本とは要害山(鳥取県西伯郡南部町・331m)といわれている。その北麓に赤猪岩(あかいいわ)神社(鳥取県西伯郡南部町寺内)があり、境内には「大国主大神御遭難地」の石碑が建てられている。



しかしながら、安政5年(1858)の『伯耆誌』には、

「この石(赤猪岩)についてはとくに祭祀が行われていたわけではなく、あるとき祟りをなしたため、それを畏れて荒神として祭り始めたものと思われる」

とあり、江戸時代には大国主の神跡という認識はなく、荒神様を祭る小さな祠であったとみられる。

『鳥取県神社誌』(昭和10年)にも赤猪岩神社の創立年代は不詳とあり、大正6年(1917)に村の氏神であった久清神社(祭神はスサノオ)と合併し、その後大正11年(1922)に手間山山頂にあった赤猪神社(祭神は大国主命・刺国若比売命)と合併して、現在の赤猪岩神社となったという。

してみると、手間山の山頂にあった赤猪神社とされる(赤猪岩)が、本来の伝承地であったとも考えられるが、これ以上の資料・伝承もなく、詳細は不明というしかない。



焼けた石で死んでしまった大国主命を助けるため、母の刺国若比売(サシクニワカヒメ)は天(高天原)に上り、神産巢日神(カミムスビ)に救いを求めた。

一度死ねば生き返ることはない。普通に考えれば、死んだのではなく、重傷を負ったとみるべきであろうが、母親がわざわざ高天原に救援を求めたことは奇妙である。

出雲と高天原(筑紫)では、宗像まででも船で 4~5 日はかかる。緊急事態に直面しているときに間に合うわけがない。

ところが、その救援要請に応じて、神産巢日神(カミムスビ)は二人の娘を派遣したのである。

蜃貝比売(キサガイヒメ)と蛤貝比売(ウムギヒメ)である。

蜃貝は赤貝、蛤貝ははまぐりのことである。

『出雲国風土記』によると、二人とも神産巢日神(カミムスビ)の娘である。

島根郡加賀(かか)郷の条に、

「ここは佐太大神のお生まれになった所である。御母である神魂命(カミムスビ)の御子・枳佐加比売命(きさかひめ)が『暗い岩穴である』と言って金の弓を持って射られた時に光り輝いたので加加という」

とある。神魂命(カミムスビ)の娘で、かつ佐太神社(松江市鹿島町)に祭られている佐太大神の母とされている。

蜃貝比売(『古事記』)と枳佐加比売命(『出雲国風土記』)では漢字表記が異なるが、当用漢字のない時代にはよくあることである。

蛤貝比売(ウムギヒメ)についても、『出雲国風土記』の島根郡法吉(ほほき)郷の条に、

「神魂命の御子の宇武賀比売命(ウムカヒメ)は、法法鳥(ほほきどり・うぐいす)となりて、ここに鎮まり坐しき」

とある。

季刊「古代史ネット」第 12 号の「邪馬台国の時代⑩」において述べたように、筆者は高御産巢日神(タカミムスビ)と神産巢日神(カミムスビ)は兄弟とみている。

そのとき縷々述べたように、タカミムスビは天照大神亡きあとの高天原の最高権力者である。

カミムスビは兄のタカミムスビに命じられて、出雲を所管し、たまたまこの時期、出雲に滞在していたのかもしれない。でなければ、緊急の救助要請に対処することはできない。

蜃貝比売(キサガイヒメ)は島根郡加賀郷に居住し、蛤貝比売(ウムギヒメ)も島根郡法吉(ほほき)郷に居住していたようであるから、二人とも出雲生まれで、母は出雲の女性であった可能性も考えられよう。

『出雲国風土記』には、下表のように、カミムスビの子とされる人物が 7 人も記されている。

これらの子供が居住しているのは、島根郡を中心に楯縫郡、出雲郡、神門郡の範囲である。

カミムスビは、出雲を訪れる際に、このあたりに寄留し、複数の現地妻との間に、これらの子供たちを儲けた——とみるのは過度な推測であろうか。

神産巢日神(カミスビ)の子

文献	子	備考
古事記	1 蜺貝比売(キサガイヒメ)	・大国主命を治療
	2 蛤貝比売(ウムギヒメ)	・大国主命を治療
	3 少名毘古那神	・大国主命と協力して国造り
出雲国風土記	1 枳佐加比売命 = 蜺貝比売	・島根郡の加賀郷の条
	2 宇武賀比売命 = 蛤貝比売	・島根郡の法吉郷
	4 八尋銚長依日子命 (ヤヒロホコナガヨリヒコ)	・島根郡の生馬郷の条 ・八尋銚 = 長い矛
	5 天御鳥命	・楯縫郡の条 ・楯部として飾り用祭器として楯を製作
	6 天津枳比佐可美高日子命 (キヒサカミタカヒコ)	・出雲郡の神名火山の条 ・蜺貝比売(キサガイヒメ)の兄弟か
	7 綾門日女命	・出雲郡の宇賀郷の条 ・大国主命の求婚を断る
	8 真玉著玉之邑日女命 (マタマツクタマムラヒメ)	・神門郡の朝山郷の条 ・大国主命が朝ごとに通った妃
先代旧事本紀	9 天御食持命 (アメミケモチ)	・後裔の天道根命は紀伊国造等の祖 ・カミスビ・天御食持命・天道根命
	10 天神玉命	・ニギハヤヒに随行した32人の一人 ・後裔の賀茂建角身命は賀茂県主らの祖
新撰姓氏録	11 角凝魂命(つのこりむすび)	・山城国税部・河内国委文らの祖

カミスビの子供たちの居住状況



大国主命への試練

八十神による大国主命への迫害・試練は、まだまだつづく。

『古事記』は記す。

「その後、八十神は、また大穴牟遲神(大国主命)を騙して山に誘い、大木を切り倒して楔形の矢を木の間にはさんで、そのなかに入れて殺してしまいました。

それを知った母神は、再び大穴牟遲神を助け、『おまえがここにいれば、やがて八十神に殺されてしまう』といて、木の国の大屋彦神のもとに避難させました。

そこにも八十神が追いかけてきたので、大屋彦神は大穴牟遲神を逃がしながら、『スサノオ命のいる根の堅州国へ行きなさい。きっと相談に乗ってくれるでしょう』と告げました」

まず、「木の国」についてである。

紀伊の国(和歌山県)とする説をよくみかける。

もちろん、紀伊には、イザナミを祭る花窟(はなのいわや)神社(三重県熊野市有馬町)や熊野大神を祭る熊野本宮大社など、出雲との緊密な関係がみられることは確かである。

熊野大神については、『先代旧事本紀』の「神代本紀」に、「出雲国熊野に坐す建速素盞鳴尊(スサノオ)」と、熊野大神＝スサノオとされている。



	神社名	祭神	所在地
出雲	熊野大社	熊野大神	島根県松江市八雲町熊野
	比婆山	イザナミの比婆山御陵の有力候補地	島根県仁多郡奥出雲町
紀伊	熊野本宮大社	熊野坐神	和歌山県田辺市本宮町
	熊野速玉神社	速玉(はやたま)神＝イザナギ	和歌山県新宮市
	熊野那智大社	夫須美(ふすみ)神＝イザナミ	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町
	飛瀧(ひろう)神社	大己貴神(大国主命)・ご神体は那智大滝	和歌山県那智勝浦町那智山
	花窟神社	イザナミとカグツチ・ご神体は巨岩	三重県熊野市有馬町

しかしながら、熊野大神ないしスサノオが神格化されるのは、ずっと後代のことである。

そして、「木の国」はかならずしも「紀伊の国」をさすわけではない。

「木の国」あるいは「毛の国」は、もともと樹木の多い地域をさすいわば普通名詞のようなものであったとみられる。

九州の豊前地方の山国川流域にも「木の国」＝「毛の国」(築上郡上毛町)があり、筑後の大牟田地方にも「木の国」＝「毛の国」【大牟田市の三池 (もと御毛)】があった。

上毛野国(群馬県)と下毛野国(栃木県)もおなじような由来であろう。

したがって、『古事記』の「木の国」も、短絡的に紀伊国と判断すべきではないということになる。奥出雲あたりの山林地帯をさすものと考えらるべきであろう。

次に、大屋彦神のことである。

このことについては、季刊「古代史ネット」14号の「後期・邪馬台国の時代⑤～スサノオと五十猛命～」の嘉穂郡(嘉麻郡・穂波郡)の条において、スサノオの子の五十猛命のことであり、またの名を大屋彦命という(『先代旧事本紀』は大屋彦神、『古事記』は大屋毘古神)と述べたとおりである。

嘉穂郡各地に大屋彦命の末裔とされる八田彦の伝承が嘉穂郡各地に残されていることについても詳しく紹介しているので、そちらを参照されたい。

五十猛命の出雲における拠点、奥出雲の横田付近にあった。

大国主命は、大屋彦神＝五十猛命から、

「スサノオ命のいる根の堅州国へ行きなさい。きっと相談に乗ってくれるでしょう」

という助言を得た。

根の堅州国

「中央」と「地方」という言葉がある。

天空は丸く、地上は四角であるという古代中国の宇宙観に基づく。



中国に限らず、「天国」と「地獄」というように、高い場所を尊ぶ認識は、人類共通の感性といってもいい。『古事記』『日本書紀』における、

【高天原は、神々が住む天上の世界】

【黄泉の国および根の堅州国は、地下の世界】

【葦原中国は、地上の世界】

というのも、高い場所を尊ぶ人類の感性を前提にしている。

しかしながら、現在では「中央」といえば首都である東京を示し、「地方」といえば首都以外の地域を示す言葉として用いられている。神話的な垂直構造から水平方向への転換である。

現実のこの世のことを描写しようとするれば、必ず地理上の位置関係を示す必要がある。

天地という垂直構造を水平方向に転換して、地図によって地上の位置関係を示す手法は、これもまた人類共通の知恵でもある。

区 分	神話的意味	地上的意味	備 考
高天原	天上	都・中央	九州(筑紫)
黄泉の国・根の堅州国	地下	地方	出雲
葦原中国	地上	日本列島	時代によって変遷

『古事記』によれば、イザナミに「海原を治めよ」と命じられたスサノオは泣いてばかりいた。

イザナギが「なんでお前は命じられた国を治めずに泣いているのか」と聞くと、スサノオは「私は死んだ母(イザナミ)の国の根の堅州国に行きたいと思って泣いているのです」というくたじけなさがある。

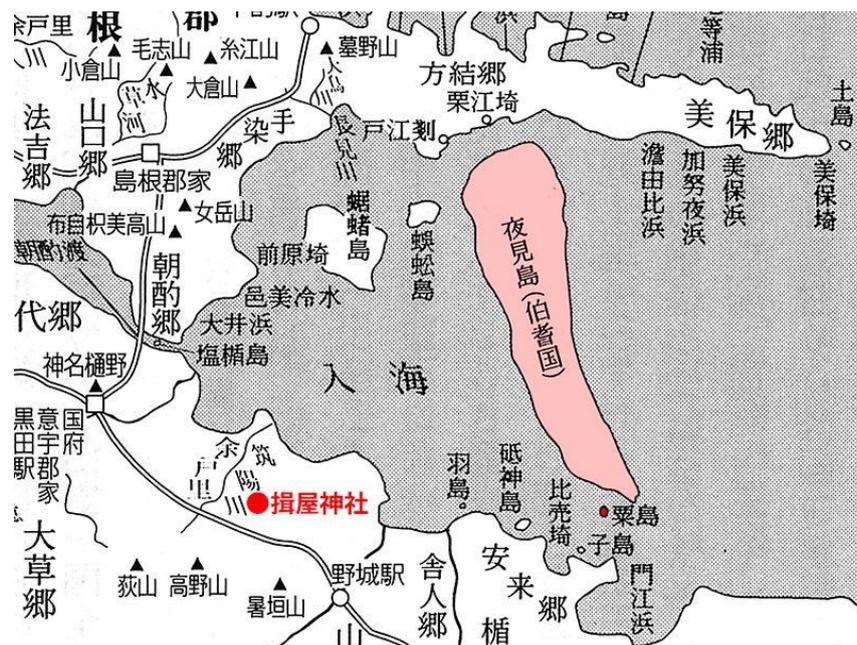
『春秋左氏伝』や『史記』では、死後の世界を「黄泉の国」と記している。

『古事記』においても、「根の堅州国」と「黄泉の国」は、死後の世界という意味で用いられている。

ところが、一方で、根の堅州国・黄泉の国は、イザナミあるいはスサノオが拠点とした出雲地域を指し示している。

この地上説の見地に立てば、いわゆる「根の堅州国」の地上における候補地は、

- ・イザナミの陵と伝わる「出雲国と伯耆国の堺の比婆山」
 - ・スサノオ・五十猛命・クシナダヒメの伝承が残る「奥出雲」
 - ・イザナギ・イザナミの伝承が残る「揖屋(いや)神社」と「黄泉平良坂」(松江市東出雲町揖屋)
 - ・黄泉島に由来するともいわれる「夜見(よみ)島」(弓浜・ゆみがはま・鳥取県米子市)
- など、出雲東部一帯とみるのが妥当であろう。





地図13 地名の伊奘冉のある場所
(石塚尊俊編著『出雲隠岐の伝説』第一法規出版刊による)

安本美典氏も「出雲の国の東の部分の島根郡から、伯耆の国の夜見島にかけてのあたりが、根の国、黄泉の国となりそうである」と書かれている(『邪馬台国と出雲神話』勉誠出版)。

新しい大王の登場

以下、『古事記』の流れは次の①～⑦のように進む。

スサノオから大国主命への試練

①	1日目	おびたしい数のいる蛇がいる部屋の閉じ込められる	須勢理比売(スセリビメ)が渡したムカデと蜂の頒布(ヒレ)で退治
②	2日目	おびたしい数のいるムカデと蜂がいる部屋の閉じ込められる	須勢理比売(スセリビメ)が渡した頒布で退治
③		広い野原に放たれた矢を取りにいけと命じられ、その後周囲に火を放たれる。	ねずみの「中はほらほら外はすぶすぶ」の助言により脱出
④		スサノオから頭にいるムカデを取るよう命じられる	須勢理比売(スセリビメ)が渡した棕の木の実と赤土で乗り切る
⑤		眠りについたスサノオの髪を垂木に結び、入口に大岩を置いて逃走。スサノオのもとから生太刀、生弓、矢、天の詔琴を持ち出す	
⑥		スサノオから「大国主神となり、地上を統治せよ。須勢理比売(スセリビメ)を妻に」と命じられる	
⑦		葦原中国の統治者となる	

高志国の沼河比売

つづけて『古事記』は、大国主命の高志国(越の国)の沼河比売に対する求愛について述べる。

『先代旧事本紀』では「高志沼河姫」、『出雲国風土記』では「奴奈宜波比売命(ぬなかわひめ)」、あるいは「奴奈川姫」と記されているが、どういわけか『日本書紀』には登場しない。

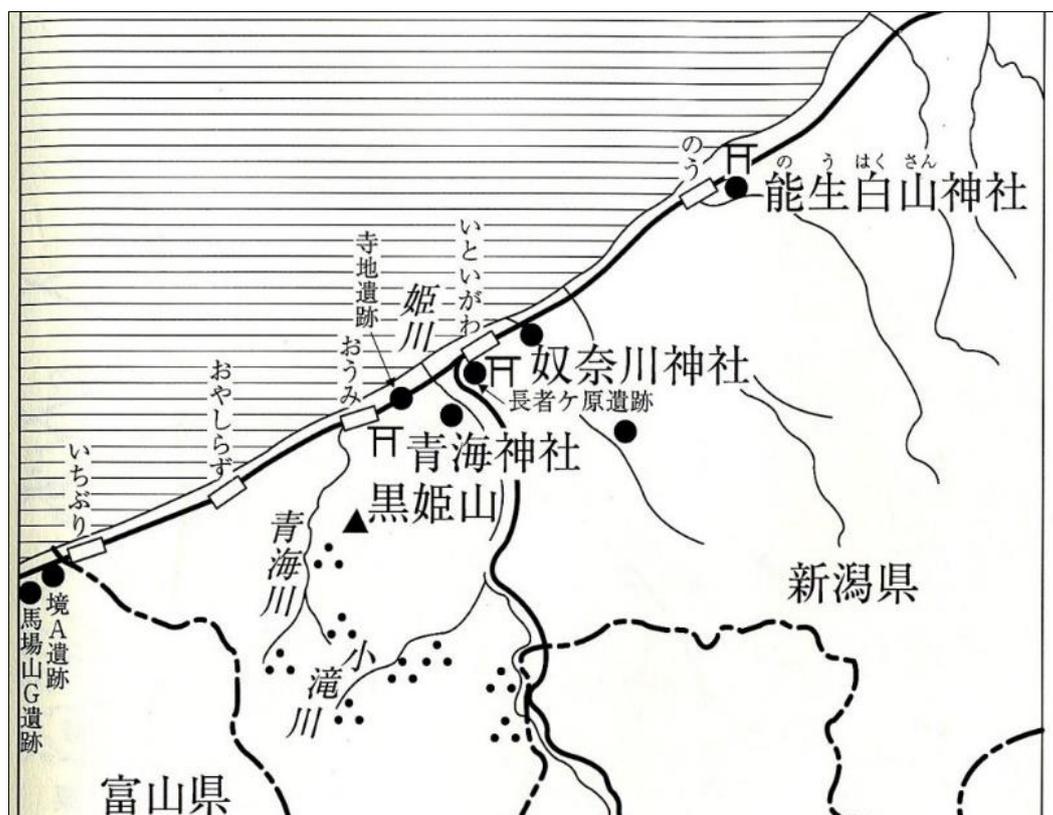
本稿においては、『古事記』を引用する場合は沼河比売を用いるが、糸魚川方面の社伝や伝承では、奴奈川姫という名がよく用いられているため、その場合にはその表記に従うこととしたい。

いずれにしても、沼河比売は沼河——すなわち、『和名抄』の越後国頸城(くびき)郡の沼川(奴乃加波・ヌノカワ)郷——現在の糸魚川市(旧糸魚川市・旧能生町・旧青海町)を拠点とした女王とみることができよう。

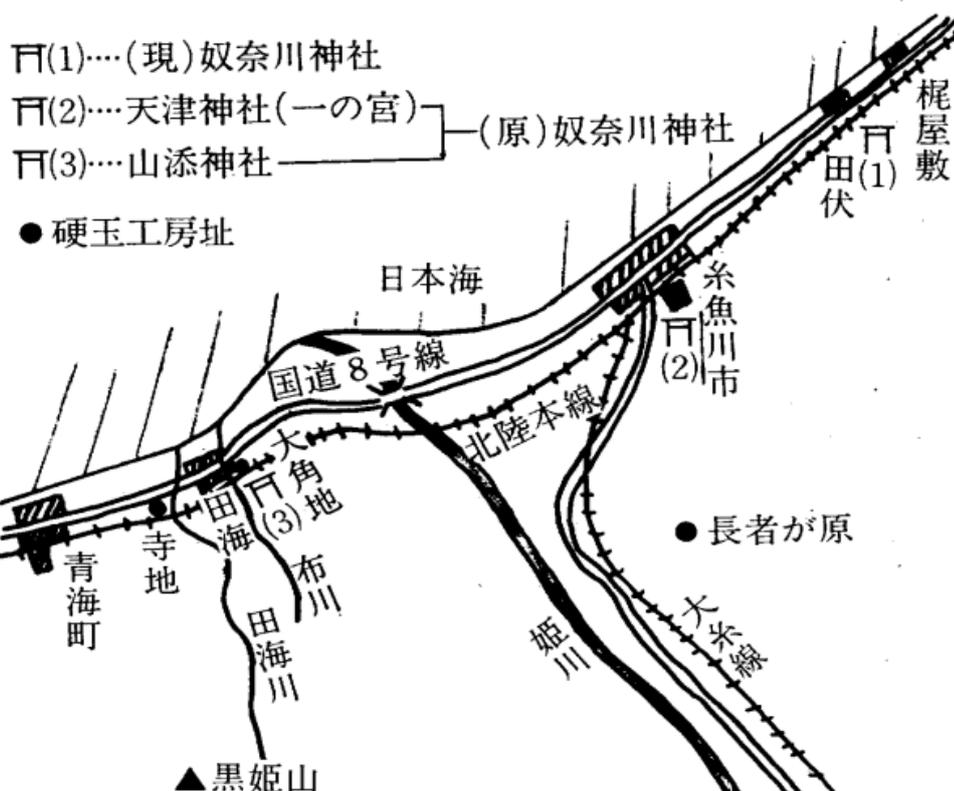
そして、沼河という名は、具体的な川の名に由来するという説がある。

- ① 姫川とする説
- ② 田海川とする説
- ③ 布川とする説

しかしながら、これらの流域はいずれも【沼=ヌ=玉=ヒスイ(硬玉)】の産地であり、玉の採れる全体的な流域——頸城郡沼川郷を「沼(ヌ)の川」と呼んだとみて特段の問題はなからう。



奴奈川神社と硬玉工房址

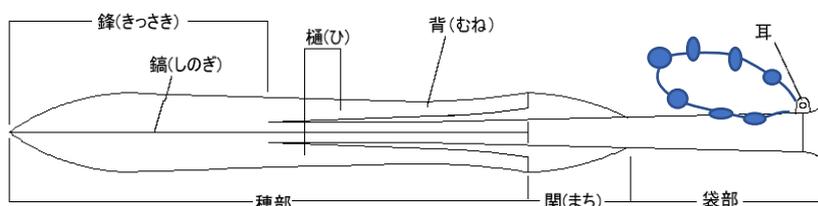


ちなみに、イザナギとイザナミの国造りの場面において、二人が天浮橋に立って、渾沌とした大地をかき混ぜた「天之瓊矛」(『日本書紀』本文)ないし「天瓊戈」(『日本書紀』一書第一・第二・第三)について、『日本書紀』は、

「瓊は玉なり。これ奴(ヌ)という」

と注を付している。すなわち、【沼＝瓊＝ヒスイ＝ヌ】で飾られた矛という意味であろう。

下図のように、「耳」の穴に通した紐に数珠状に玉を付けたとみられる。



銅矛の各部名称

『万葉集』の「沼名河の 底なる玉 求めて 得し玉かも 拾ひて 得し玉かも」(13・3247)という歌も、糸魚川地域のヒスイをさしている。

なお、大和政権成立後の神沼河耳命(綏靖天皇)や四道將軍の一人の建沼河別命(阿倍臣らの祖)の名のなかにも「沼河(ヌナカワ)」が見られるが、越後の沼河との特定の関係を見出すことができないので、単なる美称として用いられたのであろう。

いずれにしても、沼名河・沼河比売・沼川郷が、この地特産のヒスイに由来していることは明らかであり、したがって沼河比売についても「ヒスイの女王」というような意味でとらえても、まったく問題ないということになろう。

なお、『出雲国風土記』の島根郡美保郷の条には、「高志国の奴奈宜波比売命(ぬながわひめ)」の祖父の名は「意支都久辰為命(おきつくしい)」で、父の名は「俾都久辰為命(へつくしい)」と記されているが、他の文献・伝承にはまったく見えないことから、越の国の地方豪族——いわゆる「国つ神」の系譜なのであろう。

奴奈川姫命を祭る神社

延喜式には、越後国頸城(くびき)郡(新潟県糸魚川市)に奴奈川神社が記載されており、次の三社がその候補とされている。

	神社名	所在地	祭 神	備 考
1	奴奈川神社	糸魚川市田伏	奴奈川比売命	・社伝によると、成務天皇の時代に市入命が越後国の国造となり、奴奈川比売命の子の建沼河男命の裔である長比売命を娶り創祀したとされる。
2	奴奈川神社	糸魚川市一の宮	奴奈川姫 八千矛命	・天津神社の境内社 ・天津神社は景行天皇時代の創建といい、祭神はニギノミコト、太玉命、天児屋根命 ・奴奈川神社はもと山崎の地(京ヶ峰区)にあったが、山崩れのためこの地に遷座したと伝わる。
3	白山神社	糸魚川市大字能生	奴奈川姫命 伊佐奈岐命 大己貴命	・周辺地域には奴奈川姫命に関する伝承が多い。 ・島道川(能生川の支流、旧名は布川—ヌノカワ)の山際には奴奈川姫命の産所と伝えられる大きな岩穴がある。 ・島道川下流域の小見白山社の社伝では、岩穴は大己貴命が奴奈川姫命のところに婿入りしたときの館という。 ・大沢嶽には神道山(神道之峰)が連なり、大国主命が求婚のため奴奈川姫命のもとに通った道という。山頂までは1088段の石段が続く。



奴奈川姫の伝承

日本画家・川崎日香渚氏は、『奴奈川姫と建御名方命』(平成 27)のなかで、奴奈川姫に関する貴重な伝承を紹介されている。絵の才能もさることながら、その文章もすばらしいので、そのまま紹介させていただきます。

1. 頸城郡

「市史などによると、奴奈川姫の住んでいた頸城郡は 3 つの同じ名前の山に囲まれた地域とされている。それが、『黒姫山』である。西の黒姫山は糸魚川市青海にあり、男黒姫山とも呼ばれる。東の黒姫山は柏崎市刈羽にあり、女黒姫山とも呼ばれる。

この黒姫山の『黒姫』こそ、奴奈川姫のこと、もしくは奴奈川姫の母神である。」



2. 大国主命と越の神(根知彦)との対決

「越後国一の宮である糸魚川市の天津神社並びに奴奈川神社には、奴奈川姫と大国主命が祀られている。この奴奈川神社の神社伝承に、『飛び比べ伝説』という面白い伝説がある。

地元の神根知彦が、大国主命と奴奈川姫の結婚に反対したのだ。二柱の神は、山の頂上から飛び比べをし、勝った方が奴奈川姫を娶る事ができるという賭けをした。結果、馬に乗った地元の神、根知彦は落馬し、牛に乗った大国主命が奴奈川姫を娶る事になったという。

古事記では大国主命が越の奴奈川姫に会いに求婚しにやってきた妻問い神話が記されているが、これはその続きとなる地元の伝承であり、非常に興味深い。

この伝説がある山、糸魚川市根知の『駒ヶ岳』の麓では、現在も春の祭礼日に山の神が下りてくるとされ、その日村人は駒ヶ岳へは入山禁止、山の方角に向かっておはぎを供する風習が残っている。」

新潟県糸魚川市根知谷、駒ヶ岳(1487m)・根知谷別所山に牛の爪痕三つ刻まれた岩と、馬の爪痕一つ刻まれた岩とあり、昔奴奈川姫命に懸想したる土地神が大国主命の来たりたまいて姫を娶らんとしたのを憤り、大国主命の宮居へあばれ込み、論争の結果、山の高所より飛び比べをなし、勝ちし者姫を得ることにせんと約束する。

土地の神は青毛の駒に跨り、大国主命は牛に乗り、駒ヶ岳絶頂に立つ。

先づ土地の神、馬に鞭をあてて飛んだところ、かの馬の爪痕の残れる別所山の一角に達す。次に大国主命牛をはげまして飛びたまいし、不思議にも馬の達せしところよりも、三町先なる地点に達しい給うこれ今日尚、牛の爪痕の残れる岩のところなり、然るに土地の神、先づ憤激にまかせて馬を飛ばせしが、天なり神の咎めやありけむ、僅かに駒ヶ岳の中腹に達せしのみにして、しかも馬は少しも動かず、そのまま石に化してしまった。

今尚、駒ヶ岳の中腹に馬の形したる岩石ありありと見ゆ。

即ちこれなり。而してこの馬石と化してもなお、時候の変り目などには折り折り寝返りをなすと、今日土俗の信ずるところなり。

越後一の宮 天津神社並びに奴奈川神社伝承

参考文献 「奴奈川姫とヒスイ文化」土田孝雄 著



牛に乗った大国主命(画・川崎日香湮氏)



馬に乗った神根知彦(画・川崎日香湮氏)

3. 奴奈川姫の悲劇

「伝承では、大国主命と結婚し出雲へ行った奴奈川姫であったが、出雲のたくさんの妻たちを後目に、越の国に逃げ帰ってしまう。それを知った大国主命は、奴奈川姫を追いかけて越の国にやってきた。『奴奈川姫が逃げた』という伝説が、西頸城にも東頸城にも各地に伝わっている。追われた奴奈川姫は、糸魚川の稚児が池の葦原に身を隠したという。追ってきた大国主命の家来が、奴奈川姫をいぶし出そうと葦原に火を放ったが、姫はどうとう姿を現さなかった。大国主命の家来たちは泣く泣くそこに墓を建てて出雲の国に帰ったという。『・・いたく悲しみ嘆かせたまいし果てに、此の池のほとれの葦原に御身を隠させ給いて再び出てさまわざりしとなり。』(天津神社並びに奴奈川神社)現在もこの稚児が池には、沢山の葦が生えている。」

以上が日本画家・川崎日香湮氏著の『奴奈川姫と建御名方命』の抜粋であるが、糸魚川市のホームページにも、奴奈川姫の伝承が掲載されている。

糸魚川の奴奈川姫伝承

伝承地	伝承の内容
福来口(ふくがくち) (青海町黒姫山東麓)	大鍾乳洞。ここに奴奈川姫が住んでおり、機を織っては、洞穴から流れ出る川でその布をさらした。それでこの川を「布川」という。
船庭の池(福来口から二里の所)	奴奈川姫が船遊びをした池
石祠(黒姫山頂)	<ul style="list-style-type: none"> ・奴奈川姫を祭った石祠に毎年 4 月 24 日の祭日に多勢が登山する。その際不浄な物を身につけてはならない。 ・また青海町字田海(とうみ)には、この石祠の拝殿として山添社がある。湯水や大雨の時に祈願する。
岩井口(能生谷村大字島道)	水がこんこんと流れ出ており、奴奈川姫の産所という。

経ヶ峰(西海村字平牛)	奴奈川姫の一族が住む村であった。その峰の頂には神に捧げた金幣が埋められており、毎夜光を放っていたので沖の漁師の標となったという。
飯塚の森(西海村字平牛)	諏訪明神が祭られている。 この地に住んだ奴奈川姫が使った食器を埋めた所という。
宮地(能生谷村大字柵口権現岳)	奴奈川姫の旧跡で、宮地は大国主命が住んだ所という。
奴奈川姫のおもちゃ石 (浦本村字鬼伏の海岸と山にある 三個の同じような石)	奴奈川姫が遊んだ石という。
羽生の不動滝(西海村字羽生)	奴奈川姫がこの滝の水で目を洗って眼病を治したという。
奴奈川姫の鏡(青海町福来口)	出雲族に攻められ、姫川を渡り大野村に秘蔵の鏡を埋めたという。
駒ヶ嶽(根知村字梶山)	絶壁の所に馬に似た白い瘤がある。 奴奈川姫が駒ヶ嶽の麓に居たとき、大国主命が尋ねて来た。門口に男と女の声がした。男は土地の神であった。二人は賭をし、大国主は牛、土地の神は白い馬に乗って跳んだ。土地の神は早かったが、駒は動かず石に化してしまった。それで大国主の牛が先に洞穴へついた。
馬の蹄岩 (根知村字蒲池(がまいけ)の中上 方(なかじょほう))	黒姫山から駒ヶ嶽へ大国主命の馬が飛んだときの蹄の跡という。
大將軍社(西海村字市野々) 【一奴奈→一布→市野々】	奴奈川姫の夫は松本の豪族であったが、大国主命との間に争いを生じた。豪族は福来口で戦い敗けて逃げ、姫川を渡り、中山峠に遮られて濁川の谷に沿って市野々に上った。後を望み見た所が「覗戸(のぞきど)」。大国主命に追いつめられ、首を斬られてしまった。豪族を祀ったのが「大將軍社」。豪族の馬はさらに奥へ逃げ込み石になった。今根知村(糸魚川市根知地区)字梶山の向いの黒い絶壁に白い馬の形となっている。その山も駒ヶ嶽という。
胎内・横清水・わらじのぎ (能生谷村字柵口の背の権現岳)	・「胎内」という岩屋は奴奈川姫の住んだ所 ・「横清水(よこしょうず)」は奴奈川姫が杖で突いて出した清水 ・その中間にある「わらじのぎ」は、大国主命に追われて来た場所。
西山の白山様(根知村字西山)	西山の白山様の柱は一本のケヤキの木で造られている。御神体は「奴奈川姫の焼飯」という石で、盗もうとしても字蒲池へ向くと重くなって運べないという。この神様は山犬が嫌いなので、西山には山犬はいなかった。

『天津神社並奴奈川神社』(天津神社社務所・昭和 46)に記された奴奈川姫伝承

伝承地	伝承の内容
布川上流の黒姫山 (西頸城郡田海村)	奴奈川姫命の母の黒姫命が住んだ山という。 山頂に石祠があり、黒姫明神あるいは黒姫権現という。布を織り川でさらしたので布川と呼ばれる。
福来口(ふくがくち) (黒姫山の中腹)	黒姫山の中腹の洞穴で、洞口高百五十尺、横七十尺、遠くから見ると門扉のようであった。洞穴の水が布川の水源地、奴奈川姫命の布を織った場所である。
姫川 (西頸城郡糸魚川町)	糸魚川はもと厭川と書いたという。奴奈川姫命が姫川を渡るのを嫌がったのでそう呼ばれたという。
平牛山の稚子ヶ池 (糸魚川町の南方)	このあたりに奴奈川姫命住居の跡があったという。また奴奈川姫命はこの池で自害したという。大国主命と共に能登へ渡ったが、何ゆえか海を渡ってただ一人でこの地に帰ってきた。いたく悲しみ嘆いて、ついにはこの池のほとりの葦原に身を隠した。 「奴奈川姫の命は御色黒くあまり美しき方にはあらず。されば一旦大国主命に伴はれ能登の国へ渡らせたまひしかど、御仲むしましからずして、つひに再び逃げ帰らせたまひ、はじめ黒姫山の麓にかくれ住まはせたまひしが、能登にます大国主命よりの御使御後を追ひて来たりしに遇はせたまひ、そこより更に姫川の岸へ出でたまひ川に沿うて南し、信濃北条の下なる姫川原にとどまり給ふ。しかれども使の者、更にそこにも至りたれば、姫は更に逃れて根知谷に出でたまひ、山つたひに現今の平牛山稚子ヶ池のほとりに落ちのびたまふ。使の者更に御跡に随ひたりしかども、ついには此稚子ヶ池のほとりの広き茅(かや)原の中に御姿を見失ふ。よりてその茅原に火をつけ、姫の焼け出されたまふを俟(ま)ちてとらへまつらんとせり。しかれども姫はつひに再び御姿を現はしたまはずして失せたまひぬ。仍て追従の者ども泣く泣くそのあたりに姫の御霊を祭りたてまつりしとなり」
御所(根知谷上野村)	小高く土を盛り、四方を切石にて囲んでいる。奴奈川姫命宮居の跡という。
ジンゾウ屋敷 (根知谷山口山)	奴奈川姫命の従者の住居跡という。 日吉神社裏山に奴奈川姫命の神剣を埋めたという。
牛と馬の蹄岩 (根知谷別所山)	牛の爪の痕三つと馬の足跡の一つ刻まれたる岩がある。奴奈川姫命に思いを寄せた土地の神が大国主命に対して憤り、大国主命の宮居へ暴れ込み、論争の結果、山の高所より跳びくらべをなし勝ちしもの姫を得ることにせんと約す。土地の神は黒き青毛の馬に跨り、大国主命は牛に乗って、駒ヶ岳の絶頂に立つ。まず土地の神が馬に鞭をあててその絶頂より飛んで馬の爪痕の残った別所の一角に達した。次に大国主命が牛に乗って飛んだところ、不思議にも馬の到達地点から二、三町先なる地点に達した。今なお牛の爪痕の残った岩がある。土地の神はこの結果に大いに憤り、再度の勝負を求めた。大国主命快く承諾し、土地の神が憤激にまかせて馬を飛ばせしが、天なる神の咎を受けたのか、わずかに駒ヶ岳の中

	腹に達しただけで、しかも馬はそのまま動かず石に化してしまった。今なお駒ヶ岳の中腹に馬の形をした岩石がありありと見える。この馬は石と化してもなお時候の変り目などに時々寝返りをなすという。
姫ヶ淵(姫川上流)	奴奈川姫命が身を投げて隠れた所という。
コウカイ原(姫ヶ淵近く)	奴奈川姫命と建御名方神が別れた所という。

『北安曇郡郷土誌稿』(長野県北安曇教育会・昭 54)に記された奴奈川姫伝承

伝承地	伝承の内容
戸土神社の山王池(北小谷村戸土区)	建御名方神の産湯という。
姫淵(北城村字大出)	建御名方神を残して沼川姫が入水した淵という。
古宮の梨の木 うば杉(中土村奉納)	小高い丘に奴奈川姫を祭った古宮があった。白鳳年間に集落の上の方へ移して諏訪神社と称し、他の神様も合せ祀つて村の産土神とした。古宮のあつた所に高さ四尺・幅二尺五六寸・厚さ一尺位の石の墓標らしきものが建っていて、奴奈川姫の墓印といわれている。そのそばに大きな梨の木があるが、昔から伐ることを禁じられている。その近くには「うば杉」の大木があった。松本城主某が築城のためこれを伐って松本まで運搬を命じたが、伐る時四方へとび散った木片がたちまち集まって元通りにくっつき、鋸で挽けば血が出たりした。そこでその木片全部を焼き棄てた。此の木の長さは三十三丈余もあって、伐り倒した時はこの集落の入口の沢の橋になったという。またこの木を運んで平村木崎(きざき)あたりへ来た時、重くて容易に動かなくなった。このためこの地を木崎(木先)といった。 奴奈川姫の墓印のある所から少し離れた道下に「おてふ塚」がある。これは姫に仕へた侍女の墓という。
姫ヶ淵(中土村館山)	奴奈川姫が身を投げた淵という。
姫ヶ淵(南小谷村)	奴奈川姫が越後から姫川を遡って休憩した所という。

実におびただしい数の奴奈川姫伝承である。

ご承知のように、『古事記』には、沼河比売と大国主命の出会いの場面が記されている。

大国主命はいう。

「私は日本中を訪ねながら、自分にふさわしい妻を探していた。遠い遠い高志の国に、賢く美しい姫がいると聞いて、ここまで会いに来た。まだ太刀も解かず、上着すらも脱いでいない。あなたの家の前でこうして戸を叩いているが、いまだに戸が開かないのは姫が眠っているからだろうか。真夜中に鳴く鶴(ぬえ)の鳴き声が聞こえてから、すでに雉や鶏が夜明けを告げようとしている。ああ、いまいましい。いっそのこと鳥たちを打ち叩いて殺してしまおうか」

その時、扉の中から戸を開けずに沼河比売は応答した。

「大国主命よ。私はかよわい女なので渚(なぎさ)の鳥のように心さびしいのです。今は自由に水の

上を泳いでいても、そのうちにあなたの鳥になりましょう。だからどうぞそれまで死なず、命健やかに未永くお過ごしくださいませ。山に太陽が落ちれば、真っ暗な夜が参ります。そして健やかな朝がまた巡ってくるのは道理です。朝のお日様のように、にこやかにもう一度私のところを訪れてください。そうしたら、私の白い腕で、胸で、あなたを優しく抱きとめて、手をつないで体を休めて共に眠りましょう。だからその時まで、そんな辛そうな思いをなさらないで。大国主命よ」

そして姫の言葉どおり、翌日の夜に二神はお会いして結婚しました。

『古事記』に記された二人の出会いの場面では、大国主命は「賢く美しい姫」と呼び、奴奈川姫もみずから「私の白い腕で、胸で、あなたを優しく抱きとめて、手をつないで体を休めて共に眠りましょう」と色白であることを告げている。

ところが、彼女およびその母が拠点とした山は黒姫山と呼ばれている。

色が黒く、さほどの美人ではなかったというのが地元の伝承である。

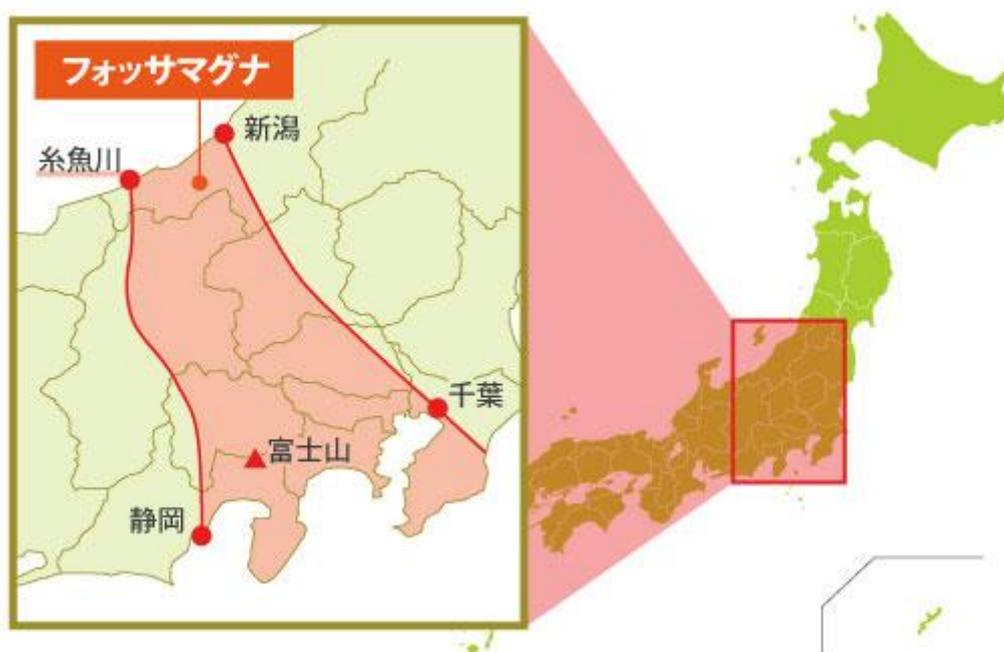
二人の仲もさほどではなく、最後には奴奈川姫が出雲から逃げ帰り、大国主命の派遣した兵に追い詰められて、自害に追い込まれている。

大国主命は奴奈川姫に魅せられたというより、奴奈川姫の有するヒスイの利権に魅せられたのではないか。もしかしたら、ヒスイの加工技術が目当てだったのではないか——という疑念すら感じさせる。



JR 糸魚川駅に建てられた奴奈川姫と建御名方神の母子像

ヒスイの歴史



よく知られているように、日本列島の真ん中には、「大きな溝」がある。

ラテン語で、「フォッサマグナ (Fossa Magna)」という。

糸魚川はそのフォッサマグナの北西端に位置している。そこに地下深くからマグマが上昇し、ヒスイを含んだ蛇紋岩が地表に押し上げられた。

ヒスイは、ジェダイト(硬玉)とネフライト(軟玉)の2種類に分けられる。

世界の宝石市場で知られるジェダイト(硬玉)の産地は、ミャンマーのカチン州・中南米のグアテマラと日本の糸魚川に限定される。

一方で、ネフライト(軟玉)は産出量も豊富で、ロシアのシベリア地方やニュージーランド・中国・台湾、中東やアフリカ大陸など、世界各地で産出されている。

ジェダイト(硬玉)は宝石であるが、ネフライト(軟玉)は石に過ぎない。

中国西域のホータン(于闐・和田)のヒスイは歴史的にも有名であるが、これまたネフライト(軟玉)に過ぎず、印鑑などとして高額で買い求めた経験をお持ちの方も少なくなかろう。

市場において稀少な宝石として高い評価を受けているのは、糸魚川のヒスイなのである。

こんな駄文を読む暇があったら、糸魚川のヒスイ海岸に行かれることをお勧めしたい。

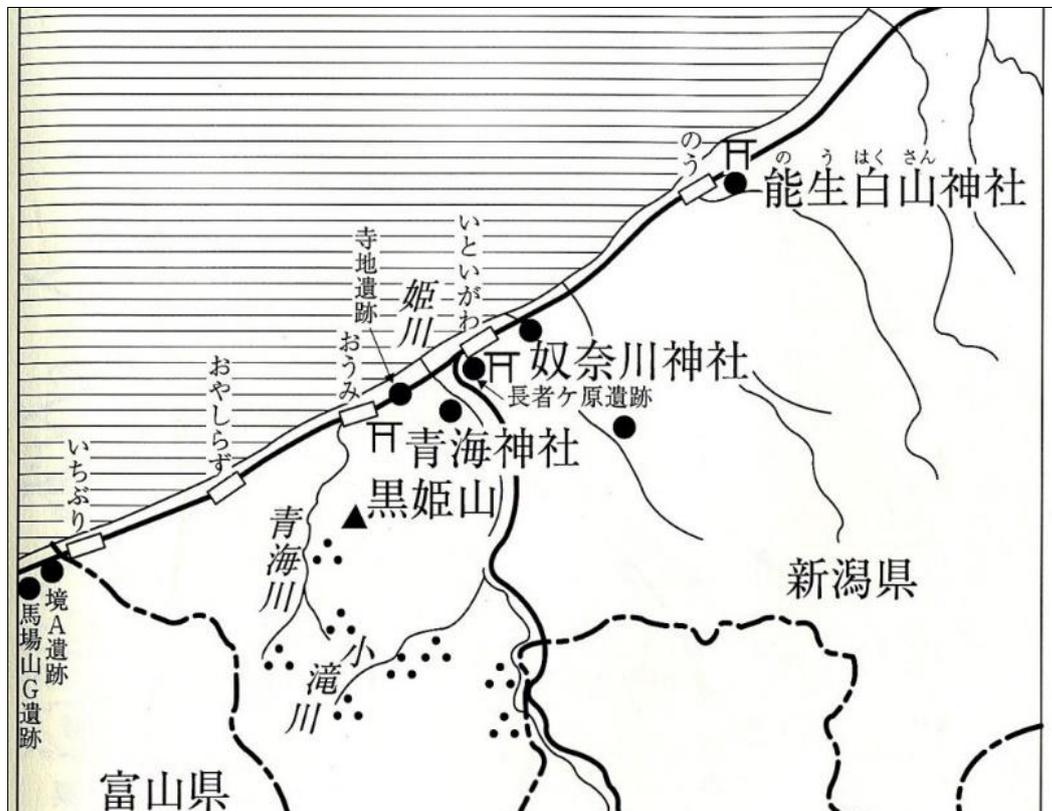
忘れられたヒスイ

後述するように、縄文時代、弥生時代・古墳時代を通じてヒスイは珍重されたが、奈良時代以降はほとんど使用されなくなり、糸魚川にヒスイの原石があることすら忘れ去られてしまった。

日本各地の古代遺跡から発見されるヒスイも、輸入されたものと考えられていた。

沼河比売の伝承をもとに、糸魚川にヒスイが存在していたのではないかという相馬御風(そうま・

ぎよふう、1883～1950、糸魚川出身の文学者、詩人、歌人、評論家、)の直観に基づき調査が行われ、昭和13年(1938)小滝川でヒスイの原石が発見された。これをきっかけに糸魚川の本格調査が行われ、ヒスイの大鉱床が発見された。



糸魚川のヒスイの加工と使用は、約4500～5000年前の縄文時代にさかのぼる。いや、下記の大角地(おがくち)遺跡から出土したヒスイのハンマーは、約7,000年前ともいわれている。

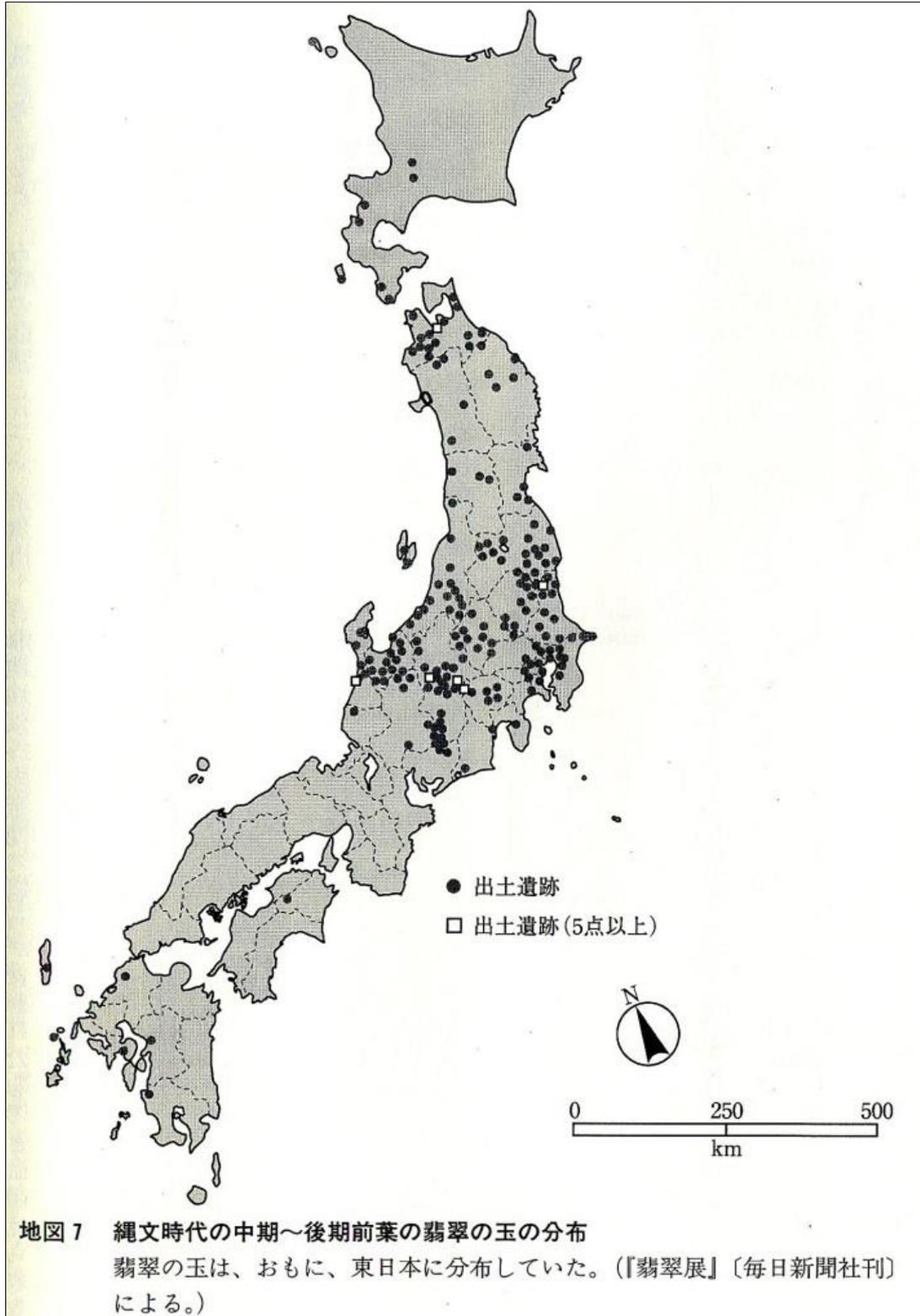
糸魚川地域の玉づくり遺跡

遺跡名	概要
大角地(おがくち)遺跡 (糸魚川市大字田海字田海)	<p>約7千年前のヒスイ製ハンマーが出土した。ヒスイが装飾品として利用される前は石を加工する道具として使われていた世界最古の例である。</p> <p>大角地遺跡は、海岸から500mほど内陸の標高5m弱の台地上に位置し、東を姫川に西を田海川に挟まれている。北陸新幹線建設に伴い平成17年度に1,152㎡の発掘調査が行われた。</p> <p>その結果、より高く安定した台地上に、縄文時代草創期から室町時代にかけて断続的に人々が暮っていたことがわかった。遺跡の最盛期を迎える縄文時代前期前半(約7,000年前)の竪穴住居や土坑からは、磨製石斧、石製装身具が多数出土した。</p> <p>木の伐採・加工に使われた磨製石斧には硬く重い蛇紋岩が、石斧の原石を</p>

	<p>打ち欠きながら形作るハンマーには蛇紋岩より硬く重いヒスイが、石斧の刃を研ぐ砥石には砂岩が用いられた。とりわけヒスイ製ハンマーはヒスイ利用の初例とみられ注目される。また、勾玉・管玉・垂玉や塊状耳飾などの石製装身具には、曲面を磨き出したり孔をあけたりするために、軟らかく加工しやすい滑石が利用された。しかしながら滑石は割れやすく、孔をあける際に破損してしまったものが多く出上している。滑石は山の露頭から採取されたものとみられるが、その他の原石は遺跡近くの海岸で容易に拾うことができる。当時の人々は、豊富な石材の特性を熟知し、目的ごとに使い分けていたようである。また出土した磨製石斧や石製装身具は、未完成品や製作途中の失敗品で、完成品はわずかであった。完成品は交易品として他地域に持ち運ばれたため、遺跡に残されなかったものと考えられる。その一方で、本遺跡からは信州産とみられる黒耀石が出上しており、当時の人々の幅広い交易をうかがい知ることができる。</p>
<p>長者ヶ原遺跡 (糸魚川市一の宮)</p>	<p>ヒスイを産出する姫川河口から約 3km の距離、標高 90m の丘陵上にある縄文時代早期から後期の遺跡である。</p> <p>1954～58 年に新潟県教育委員会(第一次調査)と糸魚川市教育委員会(第二・三次調査)による発掘調査が行われ、日本最初のヒスイ加工遺跡として注目された。</p> <p>大珠をはじめとする硬玉製の玉類・硬玉原石・硬玉加工具が確認された。中央に広がる縄文時代中期(5,000～3,500 年前)の大きな集落跡は、ヒスイの玉や蛇紋岩の石斧の生産・交易拠点としても知られている。</p>
<p>寺地遺跡 (糸魚川市大字寺地)</p>	<p>田海川下流の西側に位置する縄文時代中期と晩期の集落跡である。</p> <p>ヒスイ工房址、祭祀場の跡と推測される直径60cm余りの巨大木柱を配列した石敷きなどが発見された。</p> <p>昭和42年、土地区画整理の対象地となり、以降昭和48年まで前後5回にわたる発掘調査が実施された。その結果、中期前半から晩期にかけての、玉造工房跡とみられる竪穴住居跡6基と、巨大な木柱4本を伴う特異な配石遺構が検出され、注目されることとなった。</p> <p>I 号竪穴(中期前半)は、径5メートルの円形の竪穴で、壁面に沿って幅50～70センチのテラスを設け、中央南西寄りの部分に方形の石囲炉、北東部のテラス上に埋甕の施設をもつ。注目すべきは、この石囲炉の南に接して扁平な大形砥石が埋設され、またテラスの南壁に接する位置に、内部に細砂の堆積の認められる径60センチ、深さ5センチ程の浅い円形のピットがあり、それに接して径30センチの扁平な河原石と、この河原石に乗せた砂岩質の砥石が検出されたことである。竪穴内部からは、中期前半の土器とともに、姫川あるいは青海川の河床で採取したとみられる多数の硬玉礫、硬玉の完</p>

	<p>成品・未成品、蛇紋岩製の石斧及びその未成品と、石鏃・石槍・叩石・石錘などの石器、蠟石製大珠などが検出されており、この I 号竪穴において、硬玉を主とする玉類の生産が行われたことが明らかとなった。</p> <p>また、VI号竪穴(中期中葉)においては、I号竪穴と同様の工作用とみられる浅い円形のピット、砥石、硬玉礫などとともに、多数の蛇紋岩製石斧の未成品と剥片が検出されており、硬玉の生産と同時に、硬玉の母岩である蛇紋岩を利用した石斧の生産が行われた。</p> <p>こうした各竪穴の出土品の内容は、他の III・V 号竪穴(中期)や IV 号竪穴(後期末)、II 号竪穴(後期-晩期)についても同様であり、この遺跡が中期の前半から晩期までの長期間を通じて、硬玉を主とした玉類と蛇紋岩の石斧を生産した、生産の遺跡であることが判明した。</p>
<p>境 A 遺跡 (富山県下新川郡朝日町)</p>	<p>富山県と新潟県の県境に位置し、約 45,000 m²の広がりを持ち、山と海の距離が数百mと近接した地形上にあり、標高が5～30mで現在は水田・雑木林に所在する。</p> <p>昭和 59・60 年に北陸自動車道建設に先立ち発掘調査が行われ、縄文中期から後期にかけての竪穴住居跡 35 棟・中期から晩期の土壇約 1,700 基・小河川跡・晩期の円形木柱列 1 基などが検出された。</p> <p>出土した土器・石器などは、これまでの県内の縄文遺跡から出土した平均的遺物量に比し数倍以上に及び、10 年にも及ぶ膨大な整理作業を必要としたという。これらの出土遺物のうち、玉類や磨製石斧関係遺物・土器・石器など 2,432 点が、平成 11 年に国の重要文化財に指定された。</p> <p>特に縄文時代における硬玉の採取と加工実態を示す資料として、また磨製石斧の原石から完成までの製作工程が良く分かる資料として、他に類例を見ない貴重な資料として認められている。</p> <p>さらに硬玉・磨製石斧などの未成品が多量に出土していることから、石器製作工房として各地に流通・交易されたとみられている。</p> <p>石器の出土量は、大量の蛇紋岩製磨製石斧の未成品やヒスイ原石・ヒスイ玉類の未成品を含め整理箱約 4,000 箱・20 万点以上に及んだという。</p>
<p>馬場山 G 遺跡 (富山県下新川郡朝日町)</p>	<p>日本最古級のヒスイ工房が見つかっており、その中からヒスイ大珠の未成品が出土している。穿孔途中のもので、凹んだ部分がツルツルになっている。この遺跡では磨製石斧やその未成品、加工道具(敲石・擦切石器・砥石)も出土している。この道具は玉作りにも使われていることから、磨製石斧の石材(硬い蛇紋岩)を加工するのが得意だった縄文人が、その技術を応用して、ヒスイを加工するようになったと考えられている。</p>

なお、糸魚川で生産されたヒスイ製品は、蛍光 X 線分析の結果、北海道の美々4 号遺跡、ヲフキ遺跡、青森の三内丸山遺跡、亀ヶ岡遺跡、長野の離山遺跡など東日本の縄文遺跡から出土しており、縄文時代から広域的に流通していたことが明らかになっている。



弥生時代には、その分布が西日本にも拡大している。
出雲を介して流通範囲が拡大したのであろう。



江戸時代の1665年(寛文5)、出雲大社の境内近くの命主社(いのちぬしのやしろ)の背後の大岩の下から、銅戈とともにヒスイの勾玉が発見された。

大きさ3.5cmほどのいわゆるギョロメタイプの珠玉の一品とされ、現在、出雲大社の神宝とされている。ちなみに、科学的分析の結果、まさに糸魚川産であることが確認された。

なお、ヒスイの勾玉は、北部九州の弥生遺跡からも出土しており、そのおもな出土遺跡を紹介すれば次のとおり。

遺跡名	勾玉の型式		
宇木波田遺跡(弥生中期) (佐賀県唐津市)	緒絞(おじめ)形勾玉 	獣形(橢形)勾玉 	定形勾玉 
中原遺跡(弥生中期) (佐賀県唐津市)	環状(鞍形)勾玉 		
吉武高木遺跡(弥生中期) (福岡市西区)	獣形(橢形)勾玉 		
三雲南小路遺跡(弥生中期) (福岡県糸島市)	定形勾玉 		
原の辻遺跡(弥生中期) (長崎県壱岐市)			

時期・地域	未鷹国	伊都国	早良城	奴国	御笠郡	御原郡	夜須郡	下座郡	嘉穂郡	養父郡	三根郡	神埼郡
中期	初頭		吉武高木			小郡若山						
	前半	宇木汲田		吉武大石		永岡			鎌田原			
	中頃					隈・西小田						吉野ヶ里
	後半	田島6号 中原	三雲南 小路	吉武樋渡	那須岡本D 那須岡本B 門田	二日市峯 隈・西小田	東小田峯	栗山	立岩	六の幡	二塚山	三津永田 吉野ヶ里

なお、1975年(昭和50)に発掘調査が行われた山梨県の縄文遺跡——三光遺跡(笛吹市御坂町竹居地区)から出土した鯉節形の「ヒスイの大珠」は、国内最古級の一品とみられている。

台与が派遣した使者が中国に献上した「青大勾玉」もこのタイプとみられる。

参考のために紹介しておきたい。



長さは 11.1 cm・ヒスイ大珠(山梨県三光遺跡出土、御坂町教育委員会)

(以下、つづく)